中川根ふる里通信
＝第22号＝

編集・発行・モア・ラブ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡中川根町
上長尾857-6
ふる里通信係
郵便振替口座
〈名古屋〉 7－81556

平谷の流し焚（たい）　中川根町指定無形民俗文化財

7月14日夕刻、赤々と火を灯した
たいは、人々の祈りを受けて、大井川を下ってゆく。

写真提供　諸田秀男さん

平谷の流し林火（たい）

原田耕作

金谷町高熊に『文政十一年七月朔日（ついたち）四十三人流死供養』と刻まれた大きな自然石の碑が立っている。甲辰（きのえたつ）七月朔日と刻まれているから、災厄の年から十七年過ぎた天保十五年に建てた供養の石碑である。このいわれと平谷の「ながしたい」の起りとは深い関わりがあるのである。

文政十一年（一八二八）今から百六十余年前、六月三十日から七月一日へかけての大井川の洪水は中世以来且つてない大災害をもたらした。文政十一年は戊子（つちのえね）の年である。即ちねずみの年であったから世間一般、これをね年の大水と言ったが、川根では、水川の鉄砲水と言った。

文政十一年六月三十日巳（み）の刻（午前十時）頃より激しい雨と風が荒狂い、夜となって益々激しくなり大井川は大洪水となった。大井川奥地井川村方面は朝から豪雨であったと言う。

高熊の家々では浸水してきたので、最も安全と思われるカミの家（鈴木家）へ避難した。ところが安全と思われたカミの家が夜中となってアッと言う間も無く魔物かと思われる大水に押し流されてしまった。この魔の水こそ、水川の鉄砲水であった。カミの家もろとも四十三人が流死してしまった。

豪雨のため水川の河内川に山崩れがあって、塞き止められた河内川の水が深く広いダムとなった。然し山崩れによって出来た堰堤は、一杯になった河内川の水を持ち堪えることは出来なかった。その夜、午前零時頃になってドッと崩れてしまった。河内川の水は荒狂って満水の大井川に突入した。夜中であるから見た人は無く想像であろうが、この時、大井川の水は逆さに流れた、と言う話がある。この時の大水は大井川の突出した部分をことごとく削り取って、川幅が一気に倍になったと言う。

高熊の悲劇は、この鉄砲水によって起きた。五和村では牛尾の堤防が切れ、五和一帯が水に洗われ、金谷の五軒家では、三十余戸が流され、五和、金谷、初倉、島田方面、百八十町歩の田畑が流失し、多数の人々と家畜が流失した。その後罹災地には疫病が発生して苦しんだ。

この大洪水に大井川沿岸の人々は呆然とした。今更に水の怖しさを知った村々ではその後、水を治める神様、大井神社、津島神社を盛んに祀るようになった。特に津島神社の疫神（やくびょうがみ）送りの行事にちなんで災を焚いて川に流し、津島神社に奉納すると共に難を水に流す「ながしたい」の行事が各村で行われるようになった。

大井川にタイマツを流すことを基本とする行事は、井川の田代から、金谷町の横岡まで広く行われていたと言う。本川根町長島では、タル流しと言い、中川根の藤川、川根町の葛（つづら）竜では、タイ流し、平谷では流したい、と言ったが、目的はどこも津島神社に、たいを奉納することであった。

たいながし、流したいの「たい」は焚松の意である。流したいと言うと麦稈で作った台を流すことに受取られるが、台を流すことでなく焚を流すことである。

たい流しの台座は葛竜のものが特に大きく、台座の径が五米余、真中に立てた竹の長さが五メートルもあり、裸の若衆が五六人乗ることが出来たと言う。本川根町長島、川根町家山では花火を打上げてたい流しをおこなったと言う。

然しこの行事も永い年月の間にいつしか、平谷以外の村々からは消えてしまった。野本寛一先生が、大井川と言う本を書かれた昭和四十五年頃はまだ長島、閑蔵、平谷の三ヶ所で行なっていたと言うが、現在は平谷一ヶ所となってしまった。

大井川沿岸の村々で、この行事を忘れてしまっても、文明の世の中である現代、電源開発に依り又整備した護岸工事に依り いかなる暴風雨があっても、文政の大災害の様なことは起きないであろう。然し平谷の人達は、大井川が文明の川になろうとなるまいと、文政以来百六十余年続けてきた行事を打捨てようとは考えていないのである。

先年、NHKの星アナウンサーが、ラジオ第一放送の静岡県の川紀行取材に来て言った言葉は「ながしたいの行事が永年に亘って続けられて行く事は、平谷の人達が人間としての謙虚さ、神に対する畏敬の念を持ち続けているからでしょう。尊いことです。」と言う言葉だった。

大井川に水が豊かな時代には昔の葛篭のたいと劣らない大きな麦稈の台座を作って、これに大きなタイマツを点し、村の若者数人が火の粉を浴びながら川を下って行ったもので、その光景は勇壮なものであった。

七月十四日、昔はまだ二番茶の終わらない家があった。榛南から多勢の娘達がお茶摘みに来た時代である。この娘達が見物に押掛け河原は活気づいて、台に乗る若者の意気もまたすこぶる軒昂であった。

現在は水も乏しく、又麦を作る農家も減ったため、小さい台座に小さい焚松を灯して流す様になったが、その代り ながしたいの夜の河原は楽しいリクレーションの場となった。平谷の夏祭りと言った感がある。

ところで中世期以来の大災害を起こした水川の鉄砲水の時刻は、六月三十日と七月一日の境の夜中であったため、確実な刻限は掴めず、家山の田村保寿先生の著書、万華山三光寺と町の伝説には、七月一日、水川の鉄砲水となっており、また高熊の供養碑も七月一日となっているが、金谷町の山田健次先生著、近世金谷思考には、六月三十日となっている。

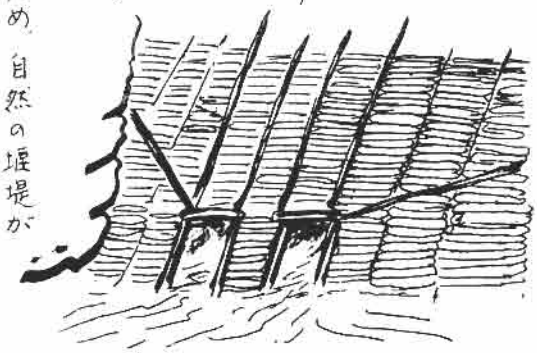
ところで鉄砲水と言っても何んのことやら判らない人も今の世の中にはあるであろう。昔、材木を流送するため、大井川奥地等で盛んに行なわれた方法で、大井川支流の渓谷に集めた材木を水の力で一気に押し流す方法が鉄砲である。鉄砲と言うことは、ドカンと一発打おすと言う意味であろう。木材を組んで堰を造りこれに水を溜めるのである。鉄砲水で材木を流し出す有様は実に豪快極まるもので、径二尺余もある巨材がもんどり打って流れ出たと言う。鉄砲流しは、まさに男の仕事であった。

文政十二年の水川の鉄砲水は、山崩れのため、自然の堰堤が出来て水が溜り、その堰堤が切れて一度に水が満水となっていた大井川に突入したもので、まさに大きな鉄砲水であったのだ。

ところで七月十四日、聖なる焚の火を奉納し、水の安全を祈願すると共に疫神をおくる行事の基である津島神社とは……津島神社は愛知県津島市神明町で、木曾川のデルタ地帯の一角にあって祭神は須佐之男命である。津島神社の大祭は七月の第四土曜日から翌日曜日にかけて徹夜で行なわれる。社前の津島川に華美な舟を浮べ管弦の楽、神楽ばやしと共に徹夜で盛大に行なわれる。京都の祇園祭りの地方版と言った感があると言う。又、芦の束を流す、ミヨシナグシの秘事は、疫神即ち やくびょう神を流し送る行事で、ながしたいの行事も津島神社の疫神送りに則ったものと伝えられる。

昭和六十三年二月十二日、平谷のながしたいは町の無形民族文化財に指定された。これを期に、少し詳しく文政の洪水、流したいの起り、鉄砲水、津島神社等に付き諸先生の著書、文献並に諸氏の談話を資料として記述した。諸賢のお叱りあれば、甘んじる覚悟である。

＝瀬沢平谷の昔語り第十一集より＝



ふる里の建物
愛宕地蔵堂　徳山

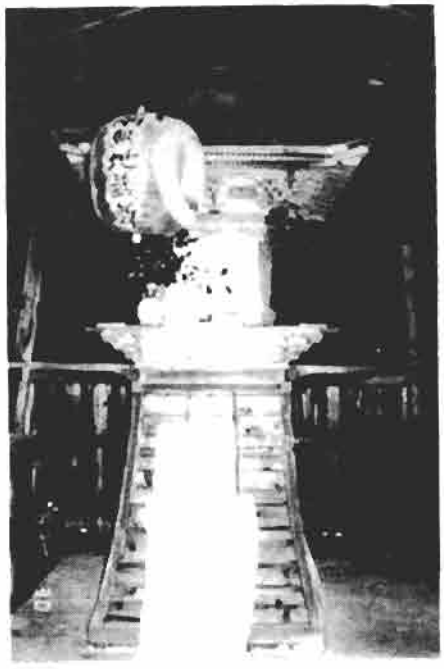
旧徳山小学校から北に約三〇〇メートルの所に、子供が遊べる広場があり愛宕地蔵堂、子安地蔵堂、秋葉燈篭と三建造物が並んでいます。

所有者は大泉院　総檜造り、間口三間、奥行三間、高床式の三間堂で、屋根は銅板葺きとなっています。

創建は長禄年間（一四五七～一四六〇）と明治二〇年五月作成の『寺社明細帳』に記載されていて　再建は嘉永三年（一八五〇）江戸末期の建物です。欄間や壁などに精巧な彫刻が施されており、天井には花、鳥、仏様　天女など　美しい絵が描かれています。

このあたりが昔の徳山の中心地であった。
高札所（お上からの公文書掲示場）もあったそうです。

秋葉燈篭



所有者は大泉院、建築年代は江戸末期、文化・文成（一八〇四～一八二九）の頃といわれますが、作者不詳です。全体が木造作りで、彫刻骨組みも精巧で、美しい燈篭です。この地方の秋葉信仰が盛んであったころの証拠物でもあります。かつて秋葉まいりの送り迎えに、街道部落、何箇所かにこの様な灯がともったのでしょう。今も残されているのは　ここと尾呂久保しかありません。貴重な財産です。

ナンマイダー

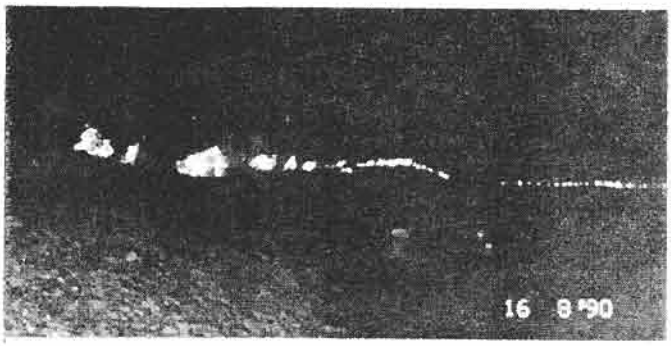
愛宕地蔵は昔から地区の人々の信仰を集めるお地蔵様でした。境内には子供達が自由に遊べる場所があり又お堂も高床式でしたが、子供達が飛び降りても決してけがをしません。お地蔵様がお守り下さると安心して遊べる所でした。……現在もそうです。

毎年七月三〇日の夜　お堂へ集まって来た人々が輪になって　大きな数珠をみんなで持って「なんまいだー　チャンチンポン」と唱えながら数珠を回し、別の者がその時に「そうばん」という鐘をチャン・チャン打ち鳴らす。にぎやかなお祭りが行なわれます。（数珠の玉は三センチメートル径のものがつなぎ合わされ所々に直径五センチメートルのものがあって　総数一〇八個からできている。）

鮎のぼり 元気に泳ぐ

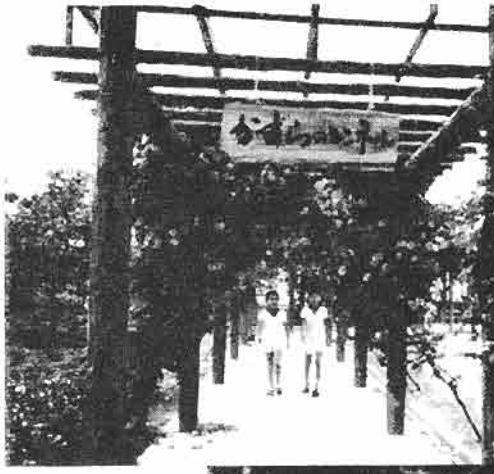
大井川に鮎釣りの季節がやって来ました。役場で企画して、地名、石風呂間、旧昭和橋柱にロープを張って、鮎のぼりを上げました。町内小中学校や、大井川鉄道駅、おもだった建物にも鮎のぼりを上げて若鮎の様な元気な子供と、町の活性化を祈願しました。空も澄んで、川も澄んで、釣り人や、水遊びに来る人達が、土曜、日曜、たくさん見られます。そして夏休み、地元の子供達も加わり、大井川は、おおいに、にぎわうことでしょう。

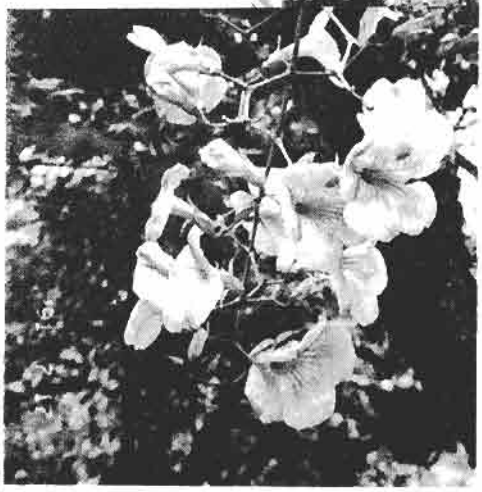
百八焚（ひゃくはったい）



下長尾地区に「ひゃくはったい」の送り盆の行事が昨年復活しました。
8月16日夜、人々は大井川に集まって、戸々に焚をたき、燈籠流しをして、お盆にお帰りになった仏様をお送りする行事です。

かけはし





中央小学校（上長尾）の校舎と体育館を結ぶ廊下は、ふじのトンネル、かずらのトンネルと名付けられ、春には、みごとな藤の房が下がり甘い香をただよわせ、夏には凌霄花（のうぜんかずら）の花が咲きみだれます。
昨年は健康教育発表年で全国から中央小っ子の健康ぶりを見学(?)視察に大勢訪ずれました。今年も子供達は健やかです。

〝故郷ツアー〟9月22～23日

関東地区 中川根会 企画 (連休)

関東地区中川根会〝故郷を想う会〟が、平成元年八月二十日開催されて早二年の日々が流れました。関東地区で集まって下さった方々五十人余中川根町からも二十人ほど出席して楽しい故郷一杯のひとときをすごしました。

前回もお世話下さった、東京都品川区にお住まいの中野唯司さん(中川根会事務局、下長尾出身)が、「故郷ツアー」を企画して下さいました。ふる里通信会員の関東方面にお住まいの方にはご案内が届いたと思います。(二年前の名簿を使用されたとの事です。)

九月二十三日は秋の彼岸の中日にもあたります。ご先祖様へのお墓まいりなどいかがでしょう。

二十二日には午後一時ごろより中川根町山村開発センターにおいて、町長、町の人達がお迎え致します。郷土芸能、国指定無形民族文化財、徳山の盆踊りの内〝鹿ん舞い〟、東京大学研究会〝落語〟(予定)が披露されます。

午後四時ごろより「故郷の人達との交流会」が梅野屋の方で開かれます。その後、宴家の方へ泊られるとの計画ですが、旅館をご利用されてもよいそうです。

交流会費＝五、〇〇〇円　宿泊費六、五〇〇円

関東方面以外で、九月二十二日午後の行事に参加して下さる方、いらっしゃいませんか？この秋、中川根へ里帰り(？)しようかな、と計画されている方、中川根町の現状も是非お聞き下さい。そして、懐しい人々にお逢い出来るかもしれませんね。

お申込は

関東地区 中川根会事務局
中野唯司さん
TEL 03－3782－2885
夕方 7時より 9時まで
(関東地区にお住いの方)

中川根町役場
企画財政課 前田宛
TEL 0547－56－0015
(直接、故郷行事に参加される方)

㊟ ツアーは7月25日〆切り
故郷行事参加の方は
9月10日〆切り

藤川出身の小西道善さんが(三重県津市在住)左ページ「モア・ラブ中川根」を作詩して下さいました。作曲者は、小西さんの友人で松阪市にお住いの方です。とてもいい歌です。どうぞ、歌ってみて下さい。故郷を想う会で、発表します。そして歌いましょう。

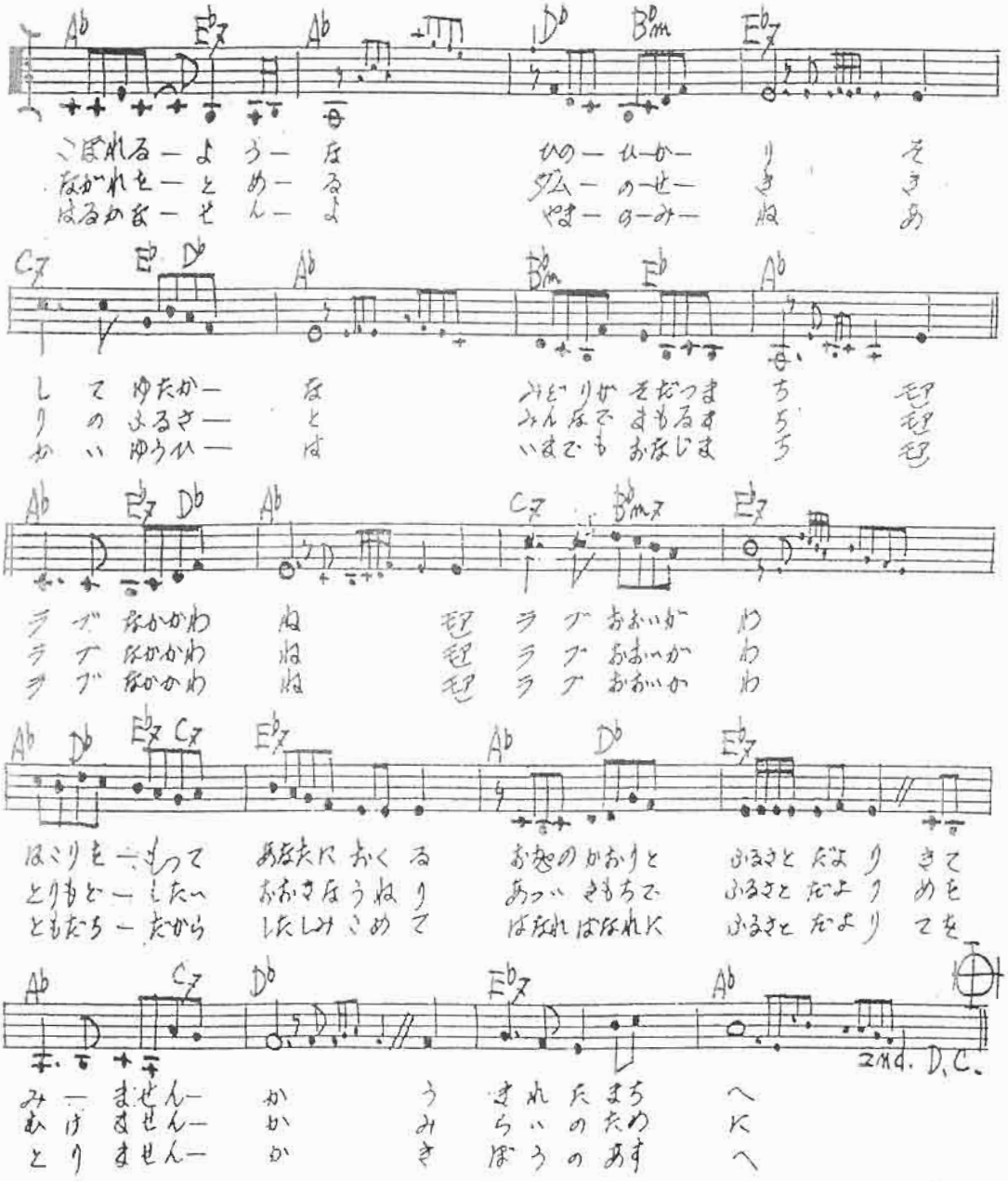
モアラブ中川根

小西道善 作詩　梅田一己 作編曲

こぼれる様な 陽の光り
そして豊かな 緑が育つ町
モアラブ 中川根
モアラブ 大井川
誇りを持って あなたに送る
お茶の香りと ふるさと便り
来てみませんか 生まれた町へ

流れを止める ダムの堰
霧の故郷 みんなで守る町
モアラブ中川根
モアラブ 大井川
取戻したい 大きなうねり
熱い気持ちで ふるさと便り
目を向けませんか 未来の
ために

遥かな線よ 山の峰
赤い夕日は 今でも同じ町
モアラブ 中川根
モアラブ 大井川
友達だから 親しみ込めて
離れ離れに ふるさと便り
手を取りませんか
希望の明日へ



特集 満州移民 最終回

「死」と隣り合わせ、糧を得るのに必死

昭和二十一年三月、中国国民党と共産党が内戦を繰り広げていた新京(長春)の片隅で、川根在満国民学校の卒業式が行われた。卒業生は十人足らず。その中に、十四歳の沢井公明さん(久野脇)もいた。

青空卒業式だった。川根開拓団が難民として収容された旧関東軍官舎前の空き地に集まった子供たちに、二十代後半の和出よし江先生(故人)が修了証書を手渡した。

「あなた方は、学校では習えない貴重な体験をしました。これからは、それを生かしてがんばって下さい。」沢井さんは先生の話を聞きながら、上空を飛び交う戦闘機の爆音の方に気を取られた。

犠牲者80人を超す

敗戦後、満州各地の開拓団は入植地を離れ、ハルピンや新京、奉天(瀋陽)などの大都市に避難した。ソ連軍や現地の中国人の襲撃から命からがら逃げてきた開拓団は、今度は飢えと伝染病に悩まされる。

新京も、約十四万人の難民であふれ返っていた。二十年八月十九日、駐屯していた関東軍が武装解除されると、新京はソ連軍の支配下に置かれた。

配給されるのは わずかばかりの飼料用コーリャンだけ。だれもが栄養失調になった。発しんチフスや はしかが流行し、抵抗力のない幼児と老人から死んでいった。沢井さんは毎日のように荷車いっぱいに積まれた死体がどこかへ運ばれて行くのを見た。

当時十四歳だった植原忠一さん(故人)も『日常的な死』に無感動になっていた。植原さんは、変死体があると聞くと やじ馬根性で見に行った。頭を撃ち抜かれた死体や、行き倒れ状態の死体が多かった。

植原さん自身も発しんチフスにかかり、生死の境をさまよった。四日度の熱に一週間うなされ続け、全身の皮膚が一枚むけた。

難民生活は一年間続いた。川根開拓団でも、脱出行では、ゼロだった犠牲者が八十人を超えた。――死と隣り合わせの毎日。――人々は生活の糧を得るのに必死だった。

植原さんはよく、麻袋を持っては新京駅の機関庫に忍び込み石炭を盗んだ。石炭は現地の中国人にヤミで売った。石炭カスの捨て場に行き、コークス拾いもした。針金をピンセットがわりにして一つひとつ集めた。石炭もコークスも一斤(六〇〇g)が一円で売れた。アワ餅一個が五円の相場である。ソ連兵の警備をかいくぐって、駅近くの空き瓶置き場から一升瓶を盗んだこともある。瓶は一本十円になった。

植原さんだけではない。川根の人たちはだれもが同じだった。中国人の家で洗濯や編み物をした婦人もいる。わずかの金で野菜や肉を買っては腹の足しにした。

「その日生きることだけを考えていた。あしたという日を考えることはなかった。だから、どんな事でもできたと思う。」植原さんは、当時の難民生活をそう振り返る。

中国人から「子供を売れ」と持ち掛けられた人もいた。ある時、三歳の息子を連れて市内を歩いていた池田ヒデさん(高郷)は行き会った中国人から「マイマイ(売ってくれ)」と迫られた。池田さんら川根の人たちは だれ一人として、子供を売り渡さなかった。しかし他の開拓団では、生活の苦し

伝染病と盗みと

さに耐えかねて子供を渡した人もいる。親から捨てられた子供たちは、中国人養父母のもとで戦後を生きた。

二十一年八月、川根開拓団は、ようやく引き揚げ船に乗ることが出来た。夢にまで見た帰国の日だったが、今後の生活を考えると、喜んでばかりもいられなかった。

ゼロから再出発

昭和二十二年六月、川根開拓団で団長代理もした中野幸逸さん(下長尾)は、三年ぶりに故国の土を踏んだ。

応召した板谷壮吉団長の後を受けて中野さんが団長代理になったのは十九年七月のことだった。五月、召集令状は中野さんのもとにも舞い込み、妻と娘を残して入隊する。敗戦後、二年近くシベリアに抑留された。終戦前後の状況から、開拓団は全滅したと信じていた。

「開拓団を見殺しにした国に、ひとこと文句を言ってやりたい。」厳しい寒さと強制労働に耐えながら、中野さんはそればかり考えていた。

帰国しても、故郷に戻るつもりはなかった。多くの犠牲を出した分村計画を推進した一人としておめおめと村には帰れない。北海道に渡って馬力ひきにでもなろう、と思っていた。

実家の母に、『国鉄金谷駅まで来い』と電報を打った。一目だけ母に会ってから、北海道へ行くつもりだった。だが、駅で迎えてくれたのは、死んだとばかり思っていた妻と娘、それに大勢の親類だった。

難民生活で八十人を超える犠牲を出したとはいえ、川根開拓団は多くの人が無事に帰ってこられた。中野さんはそれを聞き、もう一度村のために尽くす決意をする。

帰郷　本当の開拓

一家をあげて満州に渡った山田よねさん(又野脇)は、現地で召集された夫嘉一さんがフィリピン・ルソン島で戦死。戦後は女手ひとつで三人の子供を育てあげた。

ボロボロになって満州から引き揚げてきた人たちにとって、戦後の生活は人一倍厳しいものだった。帰る家があった人はまだいい。山田さんのように満州に永住を決意し、一切の財産を処分した人も少なくなかった。

……ゼロからの再出発・開拓団員たちが本当の"開拓"を始めたのは、戦後、故郷に帰ってきてからだった。……

山田さんは、村から安く分けてもらった五十アールほどの土地を耕すかたわら、日雇い仕事に出た。親類に金を借りることもしばしばだった。ガスも石油もなく、山にまきを取りに行った。長女は小学校に入学すると、母に代わって夕食の支度をした。

ようやく生活が落ち着いたのは、長女に婿を迎えたころからだ。いまでは孫が六人、苦労して開墾した土地も立派な茶畑になっている。

村再生の期待を担った分村計画は、敗戦とともに幻と消えた。情熱を傾けて計画の先頭に立った板谷団長は、シベリア抑留中に不運な死を遂げていた。

当時の村人たちにとって、貧困から抜け出すみちがほかにあれば、わざわざ遠い満州まで行かなかったかもしれない。だが、村の耕地は限られ、都会へ出ても貧しい労働者になるしかなかった。そんな村人が、村の繁栄を願い、『国のため』と信じて満州に渡ったことを、非難できる立場の人がいるだろうか。しかし、土地を奪われた中国人にとっては、彼らが『侵略者』

お国のため……侵略者だった

であったことも否定できない事実である。

中野さんは言う。「ぼくらは宗教的なまでに『五族協和』のうたい文句を信じていた。いまになって満州の歴史を読むと、がっかりする。軍部ばかりが先走って、およそ国民が一体となったものではなかった。未開の土地ならまだしも、すでに開墾してあった土地を取り上げたのだから、中国の人には大きな罪をつくったと思う。」

中川根町の場合、戦後の高度成長期に始まった人口の流出はいまだに歯止めがかかっていない。かつて余剰人口を大陸に送り出した山村は今度は深刻な過疎に悩まされている

＝完＝

昭和六十年二月 朝日新聞
静岡地方版発行
"静岡の戦争"「もう一つの中川根村」より

漢民族

蒙古族

日本人

朝鮮人

満州族

新京、満州事変が起るまでは、南からくる満鉄線の北端
北からくる東支線の南端蕭条たる広野の一寒村だった長春も
建国と同時に国都として面目を一新した。というより荒野の中
にそびえた蜃気楼、雄大な夢をのせた希望の街。人口50万人中日本人20万人

朝鮮、満州国境にそびえる白頭山頂上のカルデラ湖天池、周囲28KM、深さ390m
ここから落ちる水は、松花江となって、満州の沈野を潤し、やがて アムールの流れと合し
北上する。火山活動の激しさは、日本海をこえ、東北地方の大地に記されているという。

「まさか」と思う数値、1945年の平均寿命 男 23.9歳 女 37.5歳

平成二年夏の号から企画致しました 特集"満州移民"いかがでしたでしょう。二年ほど前でしょうか、「静岡の戦争、もう一つの中川根村」のコピーを友人からいただきました。強い戦慄をおぼえ、ふる里通信に載せるか否か迷いました。――今"完"やはりお知らせしてよかった。少し肩の荷が下りた気がします。

左、毎日新聞記事を次ページ松下さん寄稿とあわせ、ご覧下さい。

「第二次大戦の終わった一九四五年の日本人の平均寿命は、男二三・九歳、女三七・五歳と低いんです。」と、ペルシャ湾岸戦争終結後、大学教授、樋口恵子さんが示された数字について「まさか、そんな低い数字じゃないだろう、間違いじゃないか」との問いが寄せられた。

平均寿命 男七五・九一歳、女八一・七七歳の現在からは、信じられない数値ではある。しかし厚生省の簡易生命表に、そのことが記載されている。

ある年齢の人があと何年生きられるかを計算した平均余命で「平均寿命」はゼロ歳の子の平均余命を指している。この異常に低い平均寿命は 戦争で若い人が兵隊で、たくさん死んでいったこと、子供が戦争に巻き込まれたり、病死という様々なものが重なってこの数値になった、という。樋口さんは、湾岸戦争に関連して、戦争がいかに人間に過酷であるかを、この数値で示された。

こんどの湾岸戦争でのイラク側の死者は十万とも二十万人とも言われている。イラクでも同様の統計でみたとすれば、一九九一年の数値が、異常に低いことが記録されるであろう。

樋口さんは、高齢化社会は平和と一定の豊かさがなければ、ありえない社会としてとらえ、「アラブにも高齢化社会を」と、主張されている。平和の貴さを教えてくれる数字だった。

平成三年三月 毎日新聞 家庭欄より

十五年戦争の悲惨な現実
ふる里からも五百人余の犠牲者

中川根町（旧徳山村、旧中川根村）出身の戦没者は三四四人で、この内、日露戦争やシベリヤ出兵などの戦没者二四人を除いた三二〇人が十五年戦争＝昭和六年九月満州事変～二〇年八月第二次世界大戦終結＝の犠牲者である。

性別では、一人の看護婦を除いた三一九人が男性で、戦没当時の年令は、二〇～二五歳が二一五人（67・19％）で最も多く、二〇歳未満も一四人（満州開拓義勇隊五人、陸軍現役志願兵一人、海軍少年兵三人、海軍々属二人、その他三人）、老兵ともいえる三〇歳以上も四九人いる。

一戸で二人の戦没者を出した家は二八戸、三人戦没も三戸あり、平均四・六八戸に一人の犠牲者を出しており、最も多いのは一・八戸に一人の八中地区で、水川、久保尾、久野脇、田野口、壱町河内地区でも三戸に一人の犠牲者を出している。

これらの地区の青年は健康で、甲種合格で現役入隊する者が多く、従って犠牲率も高く、健康ゆえに不幸を招くといった皮肉な現象を示している。

戦没した地域は、満州二二人、北支那一三人、中支那四八人、バシー海峡一〇人、レイテ一三人、ルソン二〇人、ニューギニヤ一七人、マリアナ二六人、などで、凄惨を極めたガダルカナル島でも九人が戦死しており、日中戦争諸戦の上海敵前上陸作戦、長桂作戦、サイパンを含むマリアナ海域、ブーゲンビル、ニューギニヤ方面を転戦した静岡歩兵三四連隊及び同隊を原隊とする部隊（田上、東海林部隊など）と運命を共にしたことが判る。

戦没時期は、昭和一九年一一九人、二〇年九七人と戦争末期の犠牲者が67・5％にも達し、戦争指導者が敗色が濃いことが判っていながら、和平の努力を怠り、あたら前途有為の若者たちを死に追いやったことに改めて激しい怒りを感ずる。

満州開拓青年義勇隊員五人を含む一四人がソ連軍とのソ戦で斃れ、シベリヤを含むソ連領土で一四人が抑留中に死亡している。

戦没者名簿とは別に、満州国陳東県に分村した「川根郷開拓団」の団員は交戦による戦死は免れたものの、新京（長春）などに抑留中、飢餓や伝染病で一八一人が亡くなった。

内地でも空襲などで一〇人が死亡、沖縄戦でも六人が戦死し、小さな山奥の町だが、征里した戦線は全域にわたり、二〇歳代前半を中心に多くの若者が散り、戦争犠牲者は五〇一人に上った。

なお、二〇年五月二九日には御前崎より侵入したB29爆撃機に第五飛行戦隊の戦闘機が体当りを敢行、両機炎上、墜落し、日、米一三人の若者が大井川上空（中川根町の）で散華した。

町ではこれらの戦争犠牲者を追悼し、平和を祈念する行事を毎年行っているが、遺族は心を痛めて

「戦争は絶対に繰返さないで」と訴えている。

下泉　松下麟一

三人戦没者を出した家（敬称略）

氏名	続柄	位階勲等	死亡年令	戦死年月日・場所
（水川）				
木村芳郎	隆一 長男	旭八 陸軍兵長	31歳	20 11/30 ニューブリテン島 103兵站病院
木村勝平	〃 次男	旭八 海軍上等水兵	22	19 5/3 ニューギニヤ島「センタニ」
木村悦次	〃 3男	瑞八 海軍一等水兵	22	17 7/9 横須賀海軍病院
（水川）				
沢口進	市助 次男	旭七 海軍上等兵曹	25	16 11/23 賀茂郡竹原村 海軍病院
沢口守	〃 3男	旭八 海軍上等兵	22	21 1/21 上海第1バス兵站病院
沢口力	〃 4男	旭八 陸軍上等兵	23	19 3/22 ブーゲンビル島 ラコアタム兵站病院
（久保尾）				
松永三津男	照夫 弟	勲八 功七 陸軍歩兵上等兵	22	14 5/10 湖北省江頭店 第3師団野戦病院
松永正男	〃 〃	旭八 陸軍少尉任官	30	19 11/2 広西省桂平県 満州療養所
松永静於	〃 〃	旭八 陸軍軍属	23	20 6/10 ルソン島アリキナ山麓

満州開拓青年義勇隊戦没者（敬称略）

（上長尾）				
春沢健次	なつ 3男	義勇軍生徒	16歳	20 8/4 三江省勃利訓練所
（梅高）				
山本亨	嘉太郎 弟	瑞八 義勇軍	19	21 2/4 哈爾浜（ハルビン）市新香坊区難民所
（下長尾）				
吉永政次	ふじ 次男	瑞八 義勇軍	16	20 1/25 関東省延吉収容所
（久保尾）				
小林勝	香 弟	瑞八 義勇軍	16	20 1/20 三江省勃利訓練所
（下泉）				
竹下乙次郎	平八郎 弟	旭八 義勇軍	17	20 8/27 北安省恵地県ウルル河

地区別戦没者数

地区	戦没者数	戸数	戦没者数／戸数
藤川	45人	228戸	5.07
水川	31	103	3.32
上長尾	26	124	4.77
高郷	10	101	10.1
八中	10	18	1.8
梅高	13	82	6.31
下長尾	16	78	4.86
瀬平	16	69	4.31
久保尾	26	85	3.27
久野脇	28	87	3.11
（旧中川根村計）	221	975	4.41
徳山	46	275	5.98
田野口	21	75	3.57
壱町河内	9	29	3.22
下泉	19	108	5.68
地名	28	148	5.29
（旧徳山村計）	123	635	4.96
中川根町計	344	1,610	4.68

※ 戦没者数 ÷ 戸数 ＝ 何戸に何人の割で戦死したか。

1戸1人戦没	279戸	279人
〃 2人 〃	28戸	56人
〃 3人 〃	3戸	9人
計	310戸	344人

戦死地別戦没者数

地名	明治	大正	昭和4	9	10	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22以降	計
内地 西南役	2																2
〃 工場外	1									1		1	1	3		3	10
〃 病院			1						2	4	2	1	5	9	1	1	26
本州近海（西北）		1											1				2
〃 （南）											1	1	2	1			5
沖縄														6			6
朝鮮	2			1									4			1	8
満州	14				2		2				1			14	3		36
蒙古											1						1
ソ連		2												3	11		16
北支（山東 山西 河北外）							2	3	1				2	3	2		13
湖北								1	1		1		1	3			7
湖南										2	1	2	12	1			18
安徽												2		1			3
湖西（湖）													3	1			4
江蘇						9	2		1				1	2			15
その他中支							2						2	3	1		8
南支									1				3	1	1	1	7
台湾	台湾 1											1	1				3
バシー海峡													10				10
仏印													1				1
インド													1				1
タイ														1			1
ビルマ													2	2			4
計	20	3	1	1	2	9	8	4	6	7	（昭和17年以降右に続き表へ）						

戦没時年令別戦没者数

地名	明治17	18	19	20	21	22以降	計
ボルネオ				2			2
セレベス			5				5
レイテ			7	6			13
ルソン				20			20
ミンダナオ			1				1
サクセス				1			1
セブ				2			2
その他比島			2	3			5
ニューギニヤ	1	4	11	1			17
ニューアイスランド		1		2			3
ニューブリテン（ラバウル）			3	1			4
マリアナ			24	2			26
ソロモン	3	1	1	1			6
ビスマルク		1	1				2
ブーゲンビル			7	1			8
ガダルカナル	6	2			1		9
南方		2	5	1			8
計	17	19	119	97	20	6	339
不明							5
合計							344

年	人数
16才	3人
17	1
18	1
19	7
20	13
21	1
22	28
23	48
24	47
25	40
26	29
27	19
28	19
29	19
30	9
31	16
32	9
33	7
34	6
35	
36～40	5
41～50	6
不明	
計	12
	344

※この資料は中川根町役場にて松下さんが調査されたものです。

前頁より続く　※表中敬省略　大正10年以降次回号に続く

明治22年	1889	徳山村となり、村議会発足、村長、三倉仲四郎（地名出身、第2代）	村誌
〃 26年	1893	シカゴ万国博覧会で川根茶入賞、山本賢治郎外	山本家所蔵
〃 27年	1894	徳山村消防組設置 日清戦争に村民13人従軍	村誌
〃 28年	1895	村長、勝山庄五郎（下泉出身 第3代）	〃
〃 30年	1897	村長、山本賢治郎（徳山出身 第4代）（赤痢菌発見）	〃
〃 31年	1898	村長・椎野亀次郎（地名出身 第5代）（大隅、板垣内閣）（民法公布）	〃
〃 32年	1899	各集落で青年会発足、地名水利組合設立（村長 小川作之丞 第6代）	〃
〃 34年	1901	1月、板里産業組合設立・　4月、中川根村 藤川 信用組合設立 （1900年3月6日 産業組合法公布）	巻頭誌
〃 35年	1902	台湾出兵で 1人従軍、戦没	村誌
〃 36年	1903	（村長、小川作之丞 第7代）（東京に電車開通）	〃
〃 37年	1904	7月9日の1日降水量 353mm（50年間の極） 日露戦争に75人従軍、8人戦没	気象 村誌
〃 40年	1907	村長、中原惣太郎（地名出身・第8代） 第1回川根茶業大会開催、川根茶業会発足	〃 川茶
〃 41年	1908	徳山村青年会設立	村誌
〃 42年	1909	青年会が実業学校（夜学）開設、堀之内耕地整理	〃
〃 43年	1910	電報集落開始 12月25日の最低気温（−）19°C（50年間の極）	〃 気象
〃 44年	1911	村長、勝山亀太郎（下泉出身、第9、12代）各集落に青年会館設置	村誌
大正元年	1912	（12月21日 第1次桂内閣成立）	
〃 2年	1913	（2月20日 山本内閣成立）	
〃 3年	1914	青島出兵に徳山村より27人従軍（第1次世界大戦始まる、日本軍青島占領） 6月28日最高気温40.5°C（50年間の極）（インド紅茶輸出困難のためアメリカへの日本茶輸出激増）	村誌 気象
〃 4年	1915	村長、鈴木条蔵（田野口出身 第9代）（大正天皇即位）	村誌
〃 5年	1916	村立農業補習学校設立（10月5日 寺内内閣成立、工場法施行）	〃
〃 6年	1917	徳山村青年団発足　Ⓢ下泉信用販売購買組合設立、利用……45人 （ロシア革命）（9月17日 全輸出禁止）	〃
〃 7年	1918	村長・中村尚吉（地名出身・第10代）（8月3日より米騒動） 島田、金谷で米騒動、徳山村農会払下げ米を政府に要請	〃
〃	〃	（8月23日 シベリア出兵　9月29日 原敬内閣成立） （第1次世界大戦終る、日本茶輸出激減）	
〃 8年	1919	村長・勝山亀太郎（下泉出身、第11、12代）（3月1日朝鮮で万歳事件）	村誌
〃 9年	1920	川根地方で凍霜害（株価暴落、10月1日 第1回国勢調査内地人口 5,596万人）	〃
〃 10年	1921	村長・勝山次郎（下泉出身・第13・20代）（4月4日 米穀法成立） （11月13日 高橋内閣成立）	〃

ムラのあゆみ　その二

出典のうち　村誌は 徳山村誌
浜測は 浜村測候所（徳山観測所）50年報
勝山は 勝山本家古文書　椎野は 椎野家古文書

年	西暦	ムラの出来事	出典
天明 2～10年	1782 ～1790	（天明の飢饉）（3年）地名村で米2分作、住民305人の内278人餓える。 （8年）長雨後の害虫防除令出る。	勝山
		（9年）雑穀備蓄令出る。	〃
寛永 5年	1793	下泉村 宗門人別 御改帳　50軒　221人 （1792　ロシア使節 根室へ来る）	〃
文化 年間		桑原金奚、川根地方を旅行し、紀行文を綴る	藤田
〃 10年	1813	江戸の茶問屋20軒の株仲間認可。茶流通独占。流通独占化のため茶生産者大打撃を受ける。	勝山
文政 2年	1819	鵜山七曲開田につき再度出願	椎野
〃 5年	1822	川根20ヶ村村役人連判で茶の流通自由化陳情	勝山
〃 6年	1823	駿遠122カ村名主が茶問屋の不正を告訴 〈茶一件問題〉（シーボルト来日）	〃
〃 10年	1827	上記の告訴、証拠不十分で却下	〃
〃 11年	1828	大水害！	〃
天保 2年	1831	開田計画に地名住民賛成	椎野
〃 13年	1842	天保2年に引きつづき天保飢饉のため助郷減免願	勝山
弘化 年間	1844 ～1848	郡中御備金制度に加入	〃
〃 3年	1846	下泉村で持山にはじめて植林 （マルクス共産党宣言）	〃
嘉永 2年	1849	下泉村で山林の譲渡はじまる	〃
慶応 元年	1865	長州征伐、長征御進発上納金、下泉村 168両3分	〃
明治 6年	1873	下泉郵便局開設（8年廃局後）、志太郡第6大区、12小区長事務所を下泉に置く	村誌
〃 7年	1874	下泉八徳舎開校（5年学制発布） 浴役綿300匁免除	〃
〃 10年	1877	地名開田着工、32年に18町歩完成（西南役） 山本長右衛門、内国博覧会で大久保内務卿表彰	〃 県誌史
〃 12年	1879	下泉戸長事務所を置く	村誌
〃 13年	1880	村会発足、　村長 小川作之丞（田野口出身 初、6、7代歴任）	〃
〃 14年	1881	堀之内郵便局開局、下泉局廃止	〃
〃 18年	1885	地名外6ヶ村役場を地名に置く。	〃
〃 20年	1887	下泉巡査駐在所設置（42年廃止）	〃
〃 21年	1889	各村に消防組設置（市町村制公布）	〃

お知らせコーナー

モア・ラブ中川根

小西道善作詩 梅田一己作編曲

カセットテープあります。
すぐ歌えるようになります。
代金 500円位
電話かはがきでお申し込み下さい。
小沢節子宛
TEL 0547-56-0015

四季の里より

◎自然化粧品 ニートリィ
ヘチマ化粧水
乳液
クリーム
◎ふる里発 産品

ご注文は電話でどうぞ 月曜日休
9:00～17:00
TEL 0547-56-0542

瀬沢・平谷の昔語り

原田耕作著

長年かけて編集されました昔語り
今春第19話となりました。今までの
総集編がこの夏発刊されます。
問い合わせはお電話で‥‥
☎瀬沢 市川学さん方
TEL. 0547-56-0680
☎瀬沢 原田耕作さん方
TEL. 0547-56-0681

天王原墳丘墓をめぐる 史話と伝説

河村計三著

郷土史家 河村さんが長年かけて
研究された、中世（1.300～1.400）の
中川根の様子など‥‥‥
代金 500円位
ご注文は電話かはがきで
お申し込み下さい。
428-03
榛原郡中川根町上長尾859-6
小沢節子宛
TEL 0547-56-0015

京丸ぼたん

静岡県周智郡春野町気田伝説より
発行所 (株)こずえ
発行者 高木智夫
代金 1.100円
60年に1度咲くという、京丸ぼたん
京丸への入口には藤づるであんだ
かずら橋が‥‥‥
高木さんの祖父は郷土のほこり
高木壬太郎博士
書店にてどうぞ

暑中お見舞申し上げます

気温が体温より高い日が続きました。
自然の驚異を受けて、気力、体力下がり気味ですが、
皆様はいかがでしょう。
テレビにうつるオフィススタイル、背広、ネクタイ、長そで
でスーツ あれは何‥‥‥
秋の訪れが早いのか七月に、きれいな星空が望めます。
この様な事はめったに無い事です。より自然に近いもの
への天の恵かしら。

中川根ふる里通信 文責 小沢節子